

哲學研究

第三百十一號

第二十七卷
第二冊

歴史的世界の構造(下)

高山岩男

四

政治的世界とは國家を單位として構成せられる歴史的世界と規定することが出来る。この場合、國家と國家との間に單に儀禮的な使節の交換の如きものがあつても、それだけでは未だ嚴密な意味での政治的世界が存してゐるとは言へない。政治的世界を成立せしめるには一定の近接した生活圏が必要であると共に、その間の關係にはもつと緊密な關係がなければならぬ。それはこの政治的世界に於ては國家が密接な有機的體系を構成し、一方が榮えることは他方が滅びることであるとか、一が榮えれば他も同時に榮え、一が倒れば他もまた倒れるとかいふやうな關係でなければならぬ。このやうな構造を示す世界は、支那の春秋戰國の世を始め多くの所に見られるが、これを典型的に示してゐる世界は近代ヨーロッパである。こゝに於ては北歐やバルカンの動搖は同時にヨーロッパ全體の勢力均衡を破るやうな關係にあり、ドイツとフランスとの戰爭は同時に全ヨーロッパの動亂を惹起するやうな關係にある。戰爭の存在は

政治的世界の存在を示す根本的徴表である。密接な國際關係の存しないところに戰爭の起るべき理由はない。戰爭は國家關係の斷絶であると同時に最も強い國家關係の存続である。ヨーロッパの世界が他に比して最も頻繁に戰爭を繰り返してきてゐるのは、實はヨーロッパが典型的な政治的世界であるからに外ならぬのである。現代の戰爭が大小何れにしても世界戰の構造を示すのは、現代の世界が世界的世界であることを現すものに外ならない。而もこのやうな密接な關係には、一面に於てそれぞれの國家の主觀的意志を越えたもの、即ち國家の欲すると否とに拘らぬものが存してゐる。國家の意志如何で簡單に左右し得るやうな關係ならば、それは未だ勝義に於ける政治的な世界の關係と稱することはできない。我が國と支那との政治的關係が單に日支間の交渉のみで盡きず、同時に歐米諸國との交渉を含まざるを得なかつたところに、また現今の各國が好むと好まざるとに拘らず、國防國家の體制を整備しなければならぬところに、今日の世界が世界的な世界である所以が存すると言つてよい。世界は國家の主觀的・自發的意欲に對し、超越的・必然的な強要力を以て迫り來るものである。それ故、眞實の意味での政治的世界が存するところ、國家はこの世界に於て、この世界から國家に形成せられるのである。歴史的世界は國家によつて形成せられると共に、また國家は歴史的世界によつて形成せられるのである。近代世界は近代國家の間から形成せられると共に、近代國家は逆に近代世界に於て形成せられた。これと同様に、現代世界は現代國家の間から形成せられると共に、この現代世界に於て近代國家は凡て現代國家に改新せられるより外ない。我々はこのやうな構造をもつものを勝義に於ける政治的な歴史的世界と稱することができると思ふ。

政治的世界を右のやうに考へるならば、世界といふものの統一性が單純な統一性でなく、内に對立の緊張を孕む統

一性であることは明瞭である。このことは國家といふものの本性から當然由來するところであると思はれる。國家といふものは常に獨立性を要求するものである。國土と人民とを構成要素とする國家は、他の如何なる人間社會にもまして、自己自身の生存と存続とを強く要求するものであつて、凡そこの要求を棄てた國家といふものは存しない。獨立性は國家そのものに本然的なもの、國家の一つの根本的本質をなすものである。然るにこの獨立性は常に他に對する獨立性であつて、自己一身のみで獨立といふことは意味をなさず、獨立性とは元來對他的相對的なものである。それ故、國家の獨立性は國際的な世界に於ける他との對立や並存や交渉を當然前提してをり、また必然要求してくるのであつて、國家と世界とは元々雙關的なものであり、國家は世界に於て互に他に對して眞實の國家となるのである。この意味で、國家相互の交渉は、また國家に本然的なものであるといはなければならぬ。即ち、國家には獨立と交渉との二面、或は對自性と對他性との二面が、その本質として存するのである。然るにこの獨立と交渉とは、それ自身の中に相反する傾向を含んでゐる。獨立は内に封鎖性の傾向を含んでをり、交渉は内に開放性の傾向を含んでゐる。このやうな獨立と交渉、封鎖と開放との、相反する兩傾向が同時に成立するやうな場面、それが世界に外ならぬのである。世界に於て始めて國家の獨立も交渉も、封鎖も開放も事實上可能となる。裏から言へば、世界の存せぬところには、國家の獨立も交渉も、封鎖も開放も存せず、從つて凡そ充實した意味の國家は存しないのである。世界の存せぬところに封鎖も孤立も存せぬことは、社會のないところに逃避も隠遁も存し得ないのと同様である。鎖國政策も一つの對世界的政策である。侵略も戰爭も、和平も國際道徳も、凡てこのやうな世界に於て、獨立と交渉との錯綜する境から成立する。このやうにして、政治的な歴史的世界は獨立なる國家間の交渉聯關として對立の統一といふ構造を有し、從

つて常に動的な統一をなしてゐると言はなければならぬ。

『人種、民族、國民と歴史的世界』に於て、私は國家は勝義に於て人間學的概念であり、また世界史的概念であることを論じた。國家は常に歴史的世界に於て國家であると共に、自然的・精神的なもの、或は權力的・道義的なものであり、ランケのいはゆる *das Reell-Geistige* であつて、最も具體的な人間の團體の組織體である。國家は國土と人間との自然を基體とすると同時に、常に法と倫理とをもつ精神的組織體であつて、國家はこの自然面と精神面との綜合體として存するのである。國家は國土と國民とを維持し、國家そのものの生存を持續しようとする。國家は一個の生命體である。この點に於て、國家は單に理性的に構想せられる人格社會とは異なつてゐる。そして國家のこの生存の要求は權力となつて現れ、權力は對外的には國防や戰爭に發現せられると共に、對内的には治安維持の警察力となつて現れ、權力は法律や道徳の確保にさへ發揮せられる。而も國家は單に自然的な生命體ではなくて、同時に人爲を以て構成せられる精神的組織體である。そしてこの精神的組織體である點に於て、國家の存在と存續そのものが既に國家の義務として、人倫の實現といふ意義をもつと同時に、對内的・對外的に國家は人倫や道義の實現を意圖し、國民文化形成の主體となると共に、これによつて人類文化の向上を促進しようとするのである。國家はこのやうな意味で自然的・精神的統一體であり、權力的・道義的統一體である。そしてこの二面の統一綜合の働きが政治といはれるものに外ならない。政治は従つて自然と精神、或は生命と精神との統合であり、權力と道義、或は社會と法律、或は經濟と文化などの統合の活動に外ならないのである。

國家と政治のもつこの二面性は、凡そ國家といはれ政治といはれるものの本質をなすところから、極めて古くより

説かれてゐる事柄であつて、いはゆる霸道が國家の權力面を特に強調する立場であり、王道が逆に道義面を強調する立場であることは、周く知られるところである。併し實際の歴史的事實として、單に道義のみを以て國家が建設せられた例はなく、また道義のみを以て國家が維持せられた例もない。國家の政治にとつて權力の行使は本然的なものである。而もこの權力は道義からは出てこないものであり、權力はそれ自體に於て他からは導出できない根源的なものである。併しまた實際の事實として、馬上天下をとつても馬上天下を治めた例はなく、何ら道義の伴はない單なる權力を以て國家が建設せられたり、維持せられた例もないのである。武力を行使せる者でよく武力の無力さをも自覺する。政治は必ず道義の原理に立脚するものであつて、武力の原理を以ては國家永遠の生命は保ち得ないのである。而もこの道義の原理は權力からはどうしても演繹できないのであつて、道義はまた權力と並んでそれ自體に於て他からは導出できない根源的なものである。道義と權力とは互に他から導き出せない二つの根基である。そしてこの二つは屢々相反するものとして對抗する。併しながら國家にとつては、その生存を維持することが義務であり、國家權力そのものが道義の意義を有してゐる。そして道義は國家に於て實現せらるべくして實現せられぬ當爲の理想ではなく、現實的な力や組織として現存するのである。こゝに道義と權力とは相反しながら結合する所以がある。それ故、政治は常にこれら二つの根源的な道義と權力との綜合を主旨とするのであつて、これが歴史的世界に於ける國家の對内・對外に互る政治の事實に外ならない。このやうに、權力と道義とはそれぞれ根源的なものではあるが、而も單なる權力とか純粹の道義とかいふやうなものはなく、現實に於て兩者は必ず相互に媒介し合つてのみ現存してゐるのである。これが政治的現實であり、政治的世界の實相である。

近世ヨーロッパに於て *Raison d'Etat* とか *Staatsräson* とか稱せられたものは、權力と道義との調和による國家の保全乃至發展の道を意味したやうである。或は國家行動の準則や格率として、寧ろ權力と道義との綜合の仕方や圖式を意味したと解すべきであらう。それは個人的な好惡の感情を壓して、國家の安寧保全の課題を解決すべき實際手段であつて、權力の行使は高度の合理性と合目的性とを要求するものであり、まさにこの點に於て精神的・道義的な理想と綜合せられると考へられるのである。道義と權力とは雙方根源的なものであり、國家の政治は常に二元性・二元性をもつてゐる。而もこのやうな二元的根源の緊張を孕む統一が *Staatsräson* の内實に外ならぬのであつて、マキアヴェリ以來の政治思想は結局こゝに歸着すると解せられるのである (F. Meinecke, *Die Idee der Staatsräson in der neueren Geschichte*, 1929)。

右に述べたやうに、國家の政治がそれぞれ根源的な權力と道義との二面を有し、それらの何らかの形に於ける綜合統一として存立することは、ひとり近世ヨーロッパに限らず、殆ど古今東西の歴史を通じて變りがないことと思はれる。けれども、翻つてそのいはゆる道義なるものを考へてみるに、その意義は必ずしも明白なものとは言へないと思ふ。國家の道義性の契機は國家の特殊性を越えて端的に普遍的なものであると考へられてゐる。道義が凡ゆる國家を通じて變りなき國際的普遍性をもつといふことは、道義そのものの根本的な要求であるとせられてゐる。この意味で道義は絶對的なものである。權力はこれに對して、その本性上常に相對的・對他的なもの、即ち特殊的なものである。自己に對する他者の對抗がないところに、權力といふものの存すべきいはれはない。權力と道義とが互に他から導出されない原始的根源性を有し、結びつかない相反的二元性をなすと考へられるのも、その一つの根據はこゝにあ

るであらう。今このやうに解せられてゐる道義をとつて考察してみるに、先づ最初に氣づかれる點は、それが非歴史的な性格をもつ道義と考へられてゐて、本性上歴史的世界といふものに内面的な關係をもつ道義とは考へられてゐないといふ點である。いはゆる實踐理性の無上命法と考へられたり、古來より正義と稱せられてきたものはこれであるが、今このやうな實踐理性の命法や正義の思ふ通りに實現したと假定せられた世界をば構想してみよ。さうすれば、それが歴史的世界とは全く別のものであり、それ自體に於て全く非歴史的世界であることは何人にも極めて明白である。このやうなものは凡そ世界と名づけることさへできないものである。非歴史的世界の構成員は勿論非歴史的な個人である。それ故、このやうな道義は實は直ちに理性存在とか理性人とか稱せられる非歴史的な個體的人格の道義となり、而も個人の良心に現れる極めて主觀的な當爲に過ぎなくなるのである。こゝに於ては現實の歴史の基礎たる特殊的自然性（地域性・民族性・生存性・權力性等）は全く無視せられ、世界は端的に個體の結合から成立するものと考へられ、單に個體と普通の二肢的構造をもつもの、即ちいはゆる抽象的（分析的）普通の構造をもつものとして考へられてゐる。このやうな道義から歴史的世界が根據づけられる道理はない。このやうな道義性は超國家的・超國民的なものといふべきでなく、寧ろ始めから國家・國民には無關係のものなのである。この道義に對立すると考へられる權力もまた同様に非歴史的なものと考へられてゐる。權力は言はゞ生物的生命的の保存欲の如く考へられ、權力の世界は非歴史的な生物的自然界の如く考へられるのである。このやうな權力の觀念を以て歴史や歴史的世界が基礎づけられないことも、また明白であると言はなければならぬ。このやうな意味の道義と權力との關係は、これを人間に移して言へば、人間の公的社會性と私的個人性との關係に外ならぬのであつて、道義は人間の自己分裂態に於け

る道義に外ならぬと言つてよい。このやうな道義は即ち歴史的世界の道義でも國家の道義でもなく、公私の分裂態に於ける個人個人の道徳道徳に過ぎないのである。道義が本來反權力的なものであると考へられ、權力が本來反道義的なものと考へられ、兩者が絶對に結びつかないと考へられるのはこれに由來する。このやうな立場に於ては、國家は個人的人格との比論乃至擬制による法的人格として、始めて道義的關係に入り來るものと考へられる。それ故、この道義は實質上實は社會主義の倫理に過ぎず、本來國家といふものを眞實に基礎づけ、國家そのものに本然的な倫理とはなり得ないのである。國家の道義面を強調する王道思想が國家を究極のものにせず、寧ろ常に國家を越えた天下を究極とし、現實の特殊的自然性を離れた大同の世の如きものを理想とするのは、このことを端的に現してゐる。近世ヨーロッパの國家思想の歴史が、特殊な「民族國家」の理念と普遍的な「世界公民」の理念との兩面を調和しようとして動いてゐると解せられるのも、またこのことを證據立てるものと言へるであらう (F. Meinecke, *Weltbürgertum und Nationalstaat*, 1908.)。

國家が精神的原理としては端的に普遍的な道義を、實在的・自然的・生命的原理としては端的に特殊的な權力をもつとすれば、政治が兩原理の綜合に於て極めて困難であることは言ふまでもない。この困難は非歴史的な原理を歴史に結合しようとするところから當然である。その媒介者として *Staatstheorie* の技術が生ずるのも當然であり、哲學が何らか兩原理の具體的な統一者を思索し、「世界精神」や「民族精神」を考へ、ヘーゲルの如く *Moralität* に代つて *Sittlichkeit* を提唱するのも當然である。と共に、國際間の外交原則が、近代ヨーロッパに見られた勢力均衡ポリティカル・バランスといふやうな、何らの道義性をもたぬ妥協に歸着するのをもまた當然である。併し翻つて考へてみるに、國家に就いて道義

と權力との二元性を説く思想の生じてくることは、また世界史の場面たる歴史的世界からは當然のこととも考へられるのである。既に述べたやうに、國家と世界とは變關的のものであつて、それぞれ獨立性を要求する國家が世界に於て國家となる以上、その獨立的封鎖性の面に於て特殊性を要求し、國際的開放性の面に於て普遍性を要求するのは當然であり、この普遍性の要求は道義に求められるより外ない。そしてこの普遍性の要求が進むときは、遂に非歴史的な道義の理念にまで達するのである。國家を歴史的世界の聯關より考察する以上、國家の道義的・權力的な二元性、或は兩極性に歸着することは、極めて當然なことであるとも言はなければならぬ。

併しそれにも拘らず、このやうな思想は未だ十全に國家や歴史的世界を把握する眞實の思想とは言へないのである。單なる普遍的道義も特殊的權力も、未だ現實の國家と歴史的世界とを把握し得る原理ではない。この道義は始めから國家といふものに國家の外から超越的に君臨する道義であつて、國家をその内から規制する國家それ自體の倫理、國家に固有な國家倫理ではない。それは今述べたやうに實は個人的人格の倫理に外ならないのであつて、人間の公私分裂態に於ける社會的道義に外ならないのである。それ故、この道義の構想する世界はいはゆる人類社會や人格社會であつて、それは決して歴史的世界といふべきものではなく、それ自體に於て全く非歴史的な世界に過ぎないのである。それが實在性をもたぬ主觀的な當爲の命法として、個人の心内に現れるのもこのためである。このやうな非歴史的立場にまで進めば、それはもはや嚴肅な倫理の要求を離れて、單なる知性の觀念的構想に墮すると言はなければならぬ。いはゆる人類社會や人格社會に幾らかでも現實的な實質的内容を入れることを要求せられるとき、直ちにヨーロッパ的社會の圖像が考へられたりしたのは、世界を全く非歴史的な個體と普遍的社會との無媒介的結合より考

へるこの立場の抽象的論理性より當然のことである。そしてこのやうな非歴史的社会には國家といふものが存する餘地はなく、また存すべき必然的な根據も見出し得ないであらう。このやうな道義の立場が國家の存在を以て未だ非理性的なものと考え、國家の消滅の後に理性的な人類社會や人格社會が出現すると考へるのもこれに基く。従つて、この立場は國家を以て未だ自然的・生物的・權力的なものとするのであるが、國家が單にこのやうなものでないことは今述べた如くである、國家が現存し、建設せられ、滅亡する世界は、單なる生物的世界でもなく、單なる道義的世界でもない。それは個人意志の契約を以て根據づけられたり、理解せられたりする非歴史的世界ではない。世界史の世界は、どこまでも歴史的世界である。それはそれ以上の或はそれ以下の如何なる非歴史的原理からも基礎づけられるものではない。歴史的世界はそれ自體に於て絶對性をもつ。歴史的世界を非歴史的な道義より理解し、またそれ規制しようとする思想は、道徳的理想主義として從來屢々出現したのであるが、それは國家を單に生物と解する自然主義と同様に、眞實に國家と歴史的世界とを理解する思想ではなく、従つてまたそれを嚮導する力をもつ思想でもないのである。

國家は個人倫理との類比を以ては理解し得ない自己自身の倫理をもつ。國家固有の倫理には公私分裂態に於ける個人倫理とは全く異なるものが存する。國家は他の如何なる原理からも演繹できない唯一的實在性をもつ。國家は國家以上の如何なる普遍性からも説明し得ない根源的個體である。國家はそれぞれ獨自の個性をもち、傳統をもち、國民精神をもつてゐる。即ち國家は本來的に歴史的なものであり、歴史的な個體である。このやうな歴史的國家が歴史的國家として形成せられ、また歴史的國家として自己自身を維持する場面、それが歴史的世界に外ならない。國家の倫

理も權力も凡てこの歴史的世界に於て存し、歴史的世界の中から規定せられてくる。國家は歴史的世界に於て自己自身の獨立と他に對する交渉とを有し、こゝに國家の倫理性と權力性との融合せるものを保持するのである。國家に於てはその生存を維持することが、先づ國家自身の根本の義務であり、こゝに於て自然・生命・權力と道徳的義務とは本來一つものである。國家は戰爭に際して國民の生命の犠牲を要求し、而もこの犠牲を以て國民最高の義務とするのである。このやうなことは獨り國家にのみ認められることであつて、他の社會に認められることなく、國家にとつてはその存在そのものが人倫の實現の意義を有してゐる。國家にはその外部から君臨する如何なる抽象的道義もなく、その外部から審判する如何なる法廷もない。この意味で國家は絶對的な存在であると言つてよい。併しながらこのことは國家が單純に超道義的なものとして、何ら道義の規制を受くることがないとか、國家は單に權力的なものではないとかいふことを意味するものではない。凡そ國家固有の道義には單なる道義とか權力とかいふものが、詳しくいへば、非歴史的な人格倫理とか、單に生物的な力としての權力とかいふものが存しないのである。國家固有の倫理に於ては、嘗てランケが *Moralische Energie* といふ概念を以て表現したやうな道義的生命力が、その根源をなしてゐる。こゝに於てはいはゆる權力なるものは健康な生命力・生活力そのものであり、而もそれが唯一の道義的・精神的な活力なのである。ランケの考へた *Moralische Energie* とは、生命を産み出す、精神的な、創造的な力であり、それ自ら生命であるものであつた。いはゞ抽象的な道義・權力の分裂對立以前に於ける根源的な道義的生命力そのものを意味するのである。それ故、國家に於ては外より規制する道義はなくても、内より規制する道義は立派に存する。國家は道義に於て頽廢することも、また健康であることも共に可能である。國家が道義的頽廢に陥るとき、それ

は直ちに國家そのものの生命力・生活力の衰亡を意味してをり、これはやがて國家が權力に於ても權威に於ても萎靡する結果を來すのである。國家衰滅の原因は外になくして、常に内部にある。道義的健康と生命力とは國家に於て一つものである。理性道德の立場より宋襄の仁を唱へるとき、國家は既に道義的頹廢に陥つてゐる。歴史的世界とはこのやうな意味の道義力と生命力との或は融合し、或は交錯し、或は分離する世界である。もし道義力と生命力との間に間隙や乖離が生ずるとき、こゝに國家そのものの根柢に動搖が生じ、やがて歴史的世界の動搖が生ずるのである。古來より幾多の國家は歴史的世界の中で衰亡した。それは決して外國の侵略といふ如き外部的原因に基くものではない。寧ろ内部に於ける道義力と生命力との頹廢衰退に、換言すれば道義力と生命力との分離に由因するのである。外の侵略はたゞその機會因をなすものに過ぎず、侵略を受けることそのことが既に國家の内部的崩壞に由來してゐる。世界史が世界審判であるといふ意味は、國家の上に立つ超越者の審判といふことでなく、國家自體の歴史的運命に現れた自己審判でなければならぬ。

併し國家の道義性はまた單にこのやうな直接態に於ける倫理性、即ち生命力と融合せる倫理性に盡きるものではない。歴史的世界は互に獨立せる國家と國家との自覺的な交渉聯關であり、そこに於ては國家がまた互に道義を共同紐帶として結合する。歴史的世界は國際的な政治的世界である。こゝには國際法の如き法も支配し、この法の妥當性の根柢には道義性が存してゐるのでなければならぬ。このやうな國際關係に存立する道義性の理念が前述のやうな非歴史的 성격の道義に外ならない。こゝに於て道義と權力とは對立するものと考へられ、道義は實踐理性の形式的命法としてなまの權力に對抗するのである。國家を成員として成立する國際社會は一つの結合社會であり、そこに存立する

道義は原理上個人的な人格倫理である。國際關係にある國家はこのやうな道義の主體として、また國際道徳に對して忠實と信義をもたなければならぬ。國際道徳の破壊はまた國家自體の道義性を毀損するものとして、それ自體に於て道義的意義をもつ國家の自滅を喚起するものである。併し我々はこの狀況に於ける道義を以て國家の唯一な倫理となすべきではなく、また國家固有の道義となすべきものではない。歴史的世界とは單なる國際社會の如きものではない。國際社會とは法律的概念である。それ自體に於て非歴史的性格を孕む國際社會やその法律・倫理は、決して歴史的世界やその道義たる資格を有するものではないのである。國際法も國際道徳も現實に於ては歴史的世界の現狀に即してのみ存立し、而も多く歴史的世界の現狀の是認と維持とに終止する。このことは國際道徳といふものがその本性上全く形式主義的なものであるところから當然生ずる事柄である。従つて國際道徳は多く國家がその直接態に於てもつ實質的な道義力に背馳し、歴史的世界そのものの動く生きた道義性、いはゆる *Moralische Energie* と矛盾するに至るのである。こゝに於ては形式的な正義が却つて實質的な不正義に外ならぬこととなる。このことは嘗てヘーゲルがカントの *Moralität* 乃至その世界觀を内在的に批判したところから推して知り得るであらう。歴史的世界は形式的な國際道徳に比して却つて眞實の正義の世界である。否、歴史的世界を離れて正義といふものはない。世界史が唯一の世界法廷である。端的に過去を正義とするに至る形式的な正義感、歴史を停止せしめんとする非歴史的な正義の理念、これに對する *Moralische Energie* の健康な發現が戦争といはれるものである。戦争が正義實現の意義を有し得るのはこれに基く。生命を枯渴せしめる形式的正義と生命力の奔流する實質的正義との葛藤が、歴史的世界の歴史に外ならない。形式的正義を主張する國際道徳は個人的心情の道徳と一つであり、實質的正義を主張する國家道義

は歴史的世界の道義と一つである。前者は非歴史性を終局理想とし、後者は歴史性を道義の唯一地盤とする。世界史の事實が我々に示すものは、世界史の中に働く生きた道義、いはゆる *Moralische Energie* であつて、こゝに於て非歴史的な倫理的理想や形式的正義の理念は無力であり、また實際には却つて反倫理や不正義に過ぎないのである。けれども、このやうな非歴史的正義がなほ過去を永遠化して傳統的な實力を有するところに、歴史的世界の終焉することなき葛藤と悲劇との發生する所以がある。と共に、生きた健康な道義感・道義的生命力の絶えず躍進して、非歴史化されんとする形式道德の埒を打破り、人類の道義的枯渴を常に新たに蘇生せしめて行く活動の跡、これがまた世界史の我々に顯示する尊き光明に外ならないのである。

五

經濟的世界は如何なる構造をもつであらうか。我々が用ひる世界といふ意味で經濟的世界と稱せられるものは、單に或る地域の住民と他の地域の住民との間に交易や商業が存する、といふやうな事柄だけで規定せられるものではない。もしその交易や商業が旅人の偶然な出來事であつたり、交換の對象が高々珍稀な物品や裝飾品に過ぎぬやうなものならば、如何にそれが盛であつても未だ經濟的世界が存するとは言へない。この種の貿易なら古く支那とアラビアやローマとの間にも存し、我が國と勃海との間にも存した。併しその故を以て、支那とアラビアやローマとの間に經濟的世界が存立し、日本と勃海との間に經濟的世界が存立したとは稱し難いのである。商業が世界といふものの成立に極めて重要な要素であることは疑ひなく、古代の地中海世界に見られるやうに、商業が盛になつて行くとき

そこに世界が成立することは明かな事實であるが、この場合、世界が成立するためにはこの商業に特殊な性格が存してゐなければならぬ。それは一定の地域の住民が自足經濟を維持し得なくなつて、相互の交易を俟つてのみ自足經濟が維持し得られるといふ性格である。併しこの自足經濟或は經濟的自足性といふことに就いても、我々は少しく綿密に考へる必要がある。もし生活必需品に於て經濟的自足性が保たれ、たゞ非必需品に於て交易を必要とするといふなら、未だ經濟的世界が成立してゐるとは言へない。この場合には、經濟的自足性の存続してゐる地域が、それぞれ一個の經濟的世界の構造を有してゐると言つてよい。從來、多數の歴史的世界が地球上に散在したと言ふ一つの根據は、私はこゝにあると考へるのである。經濟的世界とは生活必需品に於て經濟的自足性が保ち得なくなつて、どうしても交易が必要となつてきたとき始めて成立するものと言はなければならぬ。換言すれば、一定の廣域圏がそれ自體に於て一個の自足經濟的組織をもち來り、この中に存在する諸地域の民族生活が單獨では經濟的自足性を維持し得なくなつたとき、この廣域圏は經濟的世界となつたと稱し得るのである。

勿論、必需品と非必需品との間の區別は嚴密なものでなく、自足性と非自足性との間には程度の差が存する。こゝには文明の性格による相違が存してゐると考へなければならぬ。併しこのやうな構造をもつ經濟的世界の最も代表的なものを考へるならば、それは言ふまでもなく、ヨーロッパからの自由貿易の發展した後に於ける近代世界である。近代の國民經濟が狭い國民の範圍を突き破つて、廣く世界經濟にまで發展したとき、こゝに勝義の經濟的世界が成立したと考へてよい。こゝに至つてヨーロッパとヨーロッパ外とは、緊密な統一性をもつ經濟的世界を構成するに至つた。そしてこゝに於ては對外經濟と對內經濟とは離すべからざる雙關關係をもち、例へば對外爲替の變動は國內金融

を動搖せしめるとか、對外貿易の中止は國內生産を變動せしめるとか、内外相即せる國民的・世界的經濟が存在するのである。國民經濟と世界經濟、内と外とは有機的統一性をもち、その根柢に於ては一つものである。このやうな世界が成立するとき、世界は嚴然とした客觀的、存在性をもつてゐる。世界を離れてはもはや各地域の民族生活は維持することができず、民族生活は世界によつて維持せられ、世界から成立せしめられるのである。

併しこのやうな構造の經濟的世界は必ずしも近代にのみ限る必要はない。このやうな構成の存したところに常に經濟的世界が存したと考ふべきであり、また我々はこのやうな觀點から過去の世界史を解釋すべきである。けれども、このやうな經濟的世界の成立根據をなす貿易が發展するためには、交通機關や交通路の發達が必要であり、それに伴ふ技術文明一般の發達が必要であり、更に資本主義的經濟とそれを是認し支持する思想とが必要である。それ故、實際に於てこのやうな經濟的世界が成立したのは、極く新しい最近世の歴史の出來事であり、過去に溯れば溯る程、經濟的自足性の維持せられた經濟的世界は多數存在したと言はなければならぬ。地中海世界や中世ヨーロッパ、印度や支那、更に鎖國期までの日本、皆それぞれ一個の經濟的世界であつたと言つてよい。否、ビュツヒヤーのいはゆる封鎖的家内經濟が存在したと假定するならば、そこには小さいながら一個の世界の構造を有したものが存在したと評してもよい。勿論、交換なき封鎖的經濟とは生活必需品の交換がないといふ意味でなければならぬ。非必需品の交換は極めて古くから存してをり、恐らく人間生活の成立と共に成立してゐるであらう。このやうな交換と共に漸次生活必需品の交換が開始せられ、小さな自足經濟圏が破れて大きな自足經濟圏が成立してきたところに、人間の經濟發展史が見られるのであらう。併し文明の特質は從來は未ださまで大きな經濟的世界を形成することができなかつたのであ

る。然るに近代ヨーロッパの機械文明の急激な發達は、この邊の事情を全く一變せしめるに至つた。生活必需品に於ける自足性が完全に破壊せられ、勝義に於ける世界經濟が成立するに至つたのは、最近世の事件であり、これはヨーロッパの機械文明の進展と共に成立する事件であり、更にその根柢に於ては、ヨーロッパの資本主義の發展の結果した大きな事件であると言はなければならぬ。ヨーロッパ近代の資本主義は工業の資源地や商品の市場として、おのづからヨーロッパ外の地域を必要とするに至り、ヨーロッパ的世界のヨーロッパ外への擴張を引き起すに至つた。こゝにヨーロッパとヨーロッパ外とを打つて一丸とした世界經濟が成立の緒に就いたのであつて、この傾向は現代に進むにつれて更に著しくなつたと見られる。今日に於て經濟は本質上世界經濟であり、世界は統一的な經濟的世界となるに至つたのである。

經濟的世界は右に述べたやうに、その典型的構造としては、世界の全體性が綜合的に一個の自足經濟をなし、各地域の部分はそれ自身に於ては自足經濟を維持し得ず、世界の全體性を俟つて始めて存続し得るやうな構造をなすのである。經濟的世界は世界經濟の成立を俟つて成立する。併しこのやうな世界經濟や經濟的世界の成立した近代に於て、いはゆる國民經濟が成立した歴史的事實もまた深く注意せられなければならぬ。國民經濟の成立は封建的分散性をもつ小地域の經濟組織に對し、全國的統一性をもつ大地域の經濟組織の成立を意味し、その意味で經濟的自足性の範圍の國民への擴張を意味する。この擴張の傾向はそのまゝ國民の範圍を越えて世界へ進んで行く。近代に於ていはゆる國民經濟と世界經濟との間には原理上は何らの相違も存しない。國民經濟の原理はそのまゝ世界經濟の原理である。併し我々の深く注意しなければならぬ點は、このやうな國民經濟が經濟的世界に於て常に獨立せる自己充足性へ

の要求を含んでゐるといふ點、そしてこの點で、小地域から大地域へといふ單なる連續的擴張の傾向とは違つた傾向が存するといふ點である。一方に於て國民經濟を構成單位とする經濟的世界が、それ自身に於て始めて一個の自足經濟をなすやうな構成を要求すると同時に、他方に於て經濟的世界の構成單位たる國民經濟自體が、また可能なる限り自足を要求しようとする事實、これが近代經濟史の我々に示す極めて重要な歴史的事實なのである。國民經濟自體が事實上可能なる限り自足を維持しようとするこの要求は、いつたい何處から出てくるのであるか。それは決して純粹な經濟的欲求そのものから出てくるのではない。純粹な經濟的欲求そのものは、地方經濟より國民經濟へ、國民經濟より世界經濟へと、あくまで開放的に擴大しようとするのであつて、その間には同一の經濟原則が貫いてをり、國民經濟に封鎖的な自足を要求する如きことはあり得ないのである。従つて、國民經濟の要求する自足の契機は經濟外より來るものでなければならぬ。それが國家の獨立性といふ政治的要求に外ならない。こゝに經濟自身の内面に結びつく政治力が見られるのであつて、國民經濟はもはや純粹な經濟形態でなく、それ自身に於て政治的・經濟的なものであると言はなければならぬ。

經濟的世界の構造は従つて前に規定したやうな單純なものではあり得ないのである。否、現實には純粹な經濟的世界の如きものはなく、經濟外の要素、特に國家の政治的勢力と融合した歴史的世界としてのみ現存するのである。經濟的世界は實は同時に政治的世界である。確かに近代世界の經濟は、國民や國家の範圍を越えた國際的な世界經濟を確立した。從來各地域にとにかく自足を維持して存続した特殊的世界の並存を打破して、國際的世界が一個の自足を成すやうな經濟形式を産み、普遍的世界を出現せしめるに至つた。このことは近代世界史の驚嘆すべき事件であ

り、ヨーロッパ、世界史に世界史に於て特殊な意義を賦與する事件である。ヨーロッパの自由貿易や資本主義經濟の發展が、世界的世界成立の主因をなしたと評しても過言ではない。併しこの開放的傾向と同時に強い封鎖的傾向が、近代の歴史的世界に於て、經濟的世界の發展と共に發展してきてゐるのである。國家主義がいちゆる帝國主義に轉じ、植民地の獲得に専念し、遂にその間に血を流す鬭争を繰り返すに至つた一つの根據は、實にこの國民經濟のもつ封鎖性の要求と開放性の要求との錯綜に存してゐる。國家にとつて獨立性は國家そのものの最も根源的な本質である。國家の獨立性は經濟上必然に自足性を要求してくる。而もこの自足性は自由貿易や近代文明の本質上、もはや狭い國家の範圍を以ては確立し得ないのである。一方で經濟の世界性を要求しつゝ他方で國家の自足性を要求するとき、國家がその領土内に於て能ふ限り自足性を保つべき領土的擴張の要求を抱き、一個の自足的な世界性をもつやうな帝國を構成しようとする意圖に出ることは當然の傾向である。ここに近代帝國主義の獨自な性格がある。このやうな近代帝國の代表的なものと言ふまでもなくイギリスの海上帝國である。古代の陸上帝國と違つて、近代の海上帝國の成立には、經濟的勢力がその中心の位置を占めてゐる。勿論、このやうな經濟には特有な技術文化が背景となつて存してゐる。近代ヨーロッパの資本主義經濟には、近代ヨーロッパの機械技術と機械文明とが伴つてゐる。近代ヨーロッパ文化の背景なくして、近代の世界經濟や國民經濟はあり得ず、歴史的世界としての經濟的世界の成立、發展、變遷は理解し得ない。こゝに經濟と文化との内面的な結合が見られ、經濟的世界が同時に文化的な世界である所以が知られる。併しとにかく經濟的世界はその構成員が自足性を失ひ、世界それ自身が自足性を保つといふやうな單純な構造をもつものではなく、一面で依然世界が一個の自足性を保つ傾向を維持しながら、同時に他面で構成員がそれぞれ自足性を要求する傾

向をもつやうな構造をなすのである。換言すれば、國民經濟と世界經濟とは互に封鎖的自足性と開放的非自足性との二契機を有し、それらが緊張を孕みつゝ綜合せられてゐるところに、現實の經濟的世界が存するのである。現實の歴史的世界に於ては國民經濟は經濟的世界を要求し、經濟的世界の存在は却つて國民經濟の自律性を要求する。我々はいかに政治的世界と同様の世界構造をば見出すのである。

現實の經濟的世界はこのやうに、常に封鎖的自足性を要求する國民經濟と、總體的全體に於て完全な自足經濟が成立するやうな世界經濟とが、單に直接に結びつくやうなものではあり得なく、緊張を孕む統一、或は反對の統一として結合してゐるところに存するのである。經濟的世界が歴史的に動搖する所以はこゝにある。と共に、經濟的世界が世界である以上、單に經濟的なものではなく、同時に政治的なものであり、更に文化的なものである所以もこゝにある。現實には純粹經濟のやうなものも存しない。現實の經濟はその時代の文化の地盤の上に、國民的・國家的な政治意志の協同を俟つて成立するのである。

併し我々が近代經濟學のいはゆるホモ・エコノミクス(經濟人)の立場から純粹經濟なるものを想定し、こゝから理想類型として經濟的世界を構想してみると、それは上述のやうな現實的構造をもつものとはならないのである。もし人間が純粹の經濟人ならば、有無相通する經濟原則から、世界は全く同質的な純粹經濟的世界となる。そこは恰も人格が道德律を以て結びつく人格社會と同様に、經濟人が經濟法則を以て結びつく透明な世界である筈である。この世界には民族も國家もなく、經濟外的な政治が存することはあり得ない。いはゆる經濟人には國籍もなく、經濟人は單に欲望充足に生き、經濟法則のまゝに動く個人である。このやうな個人が端的に世界に結びつくことを考へられる。或は

端的に個人と個人との結合するところに世界なるものが考へられるのである。個人の經濟原則はそのまゝ世界經濟の原則である。このやうな經濟の思想が、道徳を端的にいはいゆる個體的人格から考へ、道徳の世界をこの人格間の結合せる社會と考へる思想と、全く同様の根柢から成立することは言ふまでもない。そこには經濟人と理性人との相違が存するのみで、個人や世界の觀念そのものは全く同一なのである。その共通の基本特色は、非歴史的、性格に存する。いはゆる經濟人も、それを構成員とする經濟的世界も、全く非歴史的なもの、歴史といふものに無縁なものである。個人は國民や國家を離れて端的に國際人であり、世界は國民や國家も存せぬ國際世界である。然るにこれが近代自由主義經濟の根本原則とせられた。そして事實上、この經濟原則は近代世界の一つの根本趨勢を代表するものとして、現實に大きな支配力をもち、特殊的世界史を普遍的世界史にまで進展せしめる最も大きな力となつたのである。併しこのやうな非歴史的な原理が、現實の歴史的世界にそのまゝの形で實現せられるわけではない。非歴史的な經濟人の經濟原則が一方でその要求を貫かうとしながら、他方政治を中心とした經濟外の諸勢力がそれに綜合せられて、近代の歴史的世界は前述のやうに國民經濟と世界經濟との緊張を孕む統一、相反的綜合といふ動的構造を示したのである。こゝに現實と理論との關聯と乖離とが同時に見られる。この非歴史的な性格をもつ近代の經濟思想は、初期の自由主義から諸種の社會主義やいはゆる唯物史觀にまで共通に流れ、經濟が政治や文化を階層的に規定するといふやうな思想に達して、國民も國家も視界から遠ざけられ、歴史的世界や世界史といふものを眞實に捉へ得る立場に至らなかつた。近代史の示す歴史的事實は經濟・國家・文化等の根源的な統合の事實であり、こゝに勝義に於ける歴史的世界が存するのである。

近代經濟學に於て、純粹經濟の世界の主體はホモ・エコノミクスと稱せられる純粹な私的個人とせられ、經濟現象はこのやうな私的個人の欲望を起發點として體系的に考察せられた。勿論、單なる欲望やその充足が直ちに經濟現象を構成するのではない。經濟現象となるには欲望にも稀少性や間接性の如き條件が必要であり、經濟的欲望は稀少な欲望満足的手段に對する間接的欲望であるとせられ、從つて欲望の充足たる消費には生産や分配・交換などの媒介が必要であり、經濟の基本現象とは分配や交換を媒介とする生産と消費との循環に外ならぬと考へられた。經濟の諸現象はこの基本現象を基礎とする合理的な經濟法則に支配せられると考へられるのであつて、こゝに於てはホモ・エコノミクスと稱せられる私的個人の經濟原理はそのまゝで直ちにいはゆる世界經濟の原理となるのである。そこには私的經濟の原理の外に、特に別個の社會經濟や世界經濟の原理なるものは存しない。そしてこの經濟から政治の干渉は排除せられることが要求せられ、そのとき却つて經濟はそれ自身の内部から調和的に發展するものと考へられた。換言すれば、純粹經濟の自由放任が經濟の本然的要求であり、それがまた經濟の理想であるとせられたのである。然るに歴史的事實として存したものは國民經濟であり、この國民經濟はもはや純粹な經濟として解し得ないものを含んでゐる。それが既に述べたやうに國家の政治力であつて、事實としての國民經濟は、直接に世界經濟に擴大しようとする經濟本然の開放的要求と、國家の封鎖的獨立性を要請する國家意志との、或は純粹經濟の涯てしなき外延的擴大性と國民の内包的統一性との綜合として成立したのである。國民經濟はそれ自身の中に反對の統一、緊張せる統合の構造をもち、このやうな統一や統合を成立せしめるものが歴史的世界上に外ならない。歴史的世界上の世界はホモ・エコノミクスの私經濟より考へられる世界經濟の世界とは全く別物である。それは本來非歴史的ないはゆる人格社會や人類社會

が歴史的世界と異なるのと全く同様である。經濟の歴史的な現實的形態は國民經濟であり、この國民經濟は歴史的世界としての經濟的世界に於て成立するのである。

國民經濟は歴史的世界に於て成立するものとして、そこに既に經濟と國家・政治との結合が存するのであるが、國家・政治と結合してゐるこの國民經濟には、同時に常に倫理がその根柢に於て結合してゐるのである。古來より經濟を政治や倫理から切り離して考へるやうな思想は極めて少く、このやうな思想は殆ど近世ヨーロッパに見られるものになつて過ぎないのである。經濟を経國濟民の義とする思想が存するやうに、衣食住に關する食貨の道には人生の完成といふ意義が内在してをり、經濟はもともと倫理を離れて存在するものではない。倫理が人倫といふ事實の上に存立すると同じく、經濟の事實はまた倫理を離れは存在しないのである。ヨーロッパ近世の經濟思想も倫理と結びついて成立し發展してゐるのであつて、私的個人の經濟原理は私的個人性の壓迫に對する解放の要求に基礎を置き、從つて私的個人性の主張は人間完成の媒介として建設的な倫理的意義を有する思想なのであつた。併し私人性の自覺に由因する公的社會性と私人性との分裂は、本來公私の統一を根源とし目的とする倫理の根本本質から見て、既に一步倫理性の喪失に進んだものと言はなければならぬ。こゝに於て私益と公益との調和的統一が經濟行爲に潜む倫理性とせられ、經濟行爲を内より規制する倫理的原理とせられた、そしてこの公益私益の調和的統一は先づ經濟的欲望の解放より自然に達成せられるといふ信念から出發したのであるが、この信念が事實でないことが證せられるや、或は國家が干渉して公私の妥協を計らうとし、或は社會主義が私人性の抑壓と公的社會性の尊重を主張して、倫理性を喪失して行く經

濟に倫理性を回復し、かくて人間の完成を達成しようとしたのである。我々はこゝに經濟と倫理との交渉・聯關を見出すことができるのであつて、ヨーロッパ近代の正統派經濟學より歴史學派及び社會主義に至る經濟思想の歴史と、いはゆる社會運動の歴史とは、實はこのやうな倫理と經濟との緊密な聯關の事實を示すものに外ならない。勿論、倫理と經濟との内面的統一が、人間の公私分裂態に於て、經濟を私的原理に基くものとし、倫理を公的原理に存するものとするやうな思想的立場を以て、眞實に達成せられるか否かは疑問の存するところである。このやうな思想的立場では、經濟と倫理とは單に外面的に對立するだけで、眞實の内面的統一に達する道理はなく、この立場は未だ經濟や倫理の觀念そのものに於て、非歴史的な立場に留つてゐることを免れてゐない。そこには政治を端的に倫理と權力との綜合と考へると同様の非歴史性が存してゐると評しなければならぬ。經濟そのものに内在する人間の完成、或いはゆる經國濟民の理念を實現するためには、經濟そのものの根本原理に歸り、經濟行爲やその主體に何らかの形に於ける公私の統一的組織性が要求せられるに至るであらう。これは近代の歴史的世界が現代に残し傳へた世界的課題をなしてゐるのである。

歴史的世界に於て政治や倫理と結びつける經濟は、更にその根柢と背景に於て廣汎な文化とも結びついてゐる。交換、分配、消費等の經濟生活の諸形式は、もともと文化の基本部門を形造るものであつて、經濟形態の様式と文化の様式とは常に平行し、その根源に於ては一つものである。我々が經濟形式からその時代の文化一般を推定し得るのもこれに基いてゐる。所有、契約、相續、刑罰等の法は經濟と密接な關係をもち、兩者は相互に豫想し合ひ規定し合ふ。經濟と文化とは何れか一方が基礎的のものとして、一方向的に他方を規定するといふのではなく、相互規定の關係

にあつて、共に時代の特定な根本趨勢或は根本傾向を表現する具體的内容をなすのである。人間の公的契機と私的契機との分裂態に於ける私的契機の端的な是認から出發した近代個人主義は、經濟に於ても法律に於ても文化に於ても、共に同様の意義と力とを以てその根柢を貫通する根本原理であつた。交換の機能と形式とは私的個人性の自覺の發展を俟つて發展するが、私的個人性の自覺の發展はまた交換の機能や發展を俟つものである。これと同様に、經濟と文化とは相互關係の中で發展すると共に、この經濟や文化がまた時代の根本趨勢或は根本傾向と相互關係をなして發展する。そして經濟や文化の頹廢、その人生完成の理想からの乖離は、やがて新たな時代の理念醸成の氣運を産み出してくるのである。

經濟と精神的文化との中間に介在して、經濟と密接な相互規定の關係をなす領域は、技術と學問の領域である。經濟と技術とはその根源に於て必ずしも一つではないが、經濟の最も基本的な要素をなす生産は技術に結びつき、技術の發展と經濟の發展とは常に平行聯關を保つのである。手工業の技術段階はそれ相應の經濟形態を形成し、機械工業の技術段階はそれ相應の經濟形態を形成する。そしていはゆる産業革命を喚起したこの手工業的技術より機械工業的技術への飛躍的發展の根柢には、もはや單なる經濟を以て解し得ない技術それ自身の發展が存してをり、この技術自身の發展にも更に技術外の學問その他文明一般の發展が基礎をなしてゐるのである。技術は言はゞ學問と經濟との媒介者の位置に立つものであつて、技術は一方生産技術として經濟に連なり、他方實驗的合理的なものとして科學に連なる。科學の發展なくしては技術の發展がなく、技術の發展なくしては經濟の發展がない。そしてまた逆に經濟の發展なくしては技術の發展もなく、技術の發展なくしては科學の發展もないのである。經濟、文化、技術、學問等は恰も

潮流のやうに、互に無盡の規定關係をなしつゝ根本的に一つの様式的統一を構成し、それが時代の潮流として動くのである。この時代の根本傾向を理念の形で現すものが人間觀であり世界觀である。近代資本主義はこのやうな意味で一個の人間觀・世界觀に立脚した近代の潮流をなし、近代の科學、技術、文化、政治等を凡て伴つて發展した偉大な經濟力であつた。これがヨーロッパに生誕しながら、その内面的要求の趨くところ、ヨーロッパ外の地域を必要とし、資本主義の發展は必然的にヨーロッパの海外膨脹となるに至つた。これがヨーロッパとヨーロッパ外との間に經濟上・文化上、内面的な關係を開く發端となり、やがて一つの共通な時代と歴史的世界とを形成せしめる由因となつた。こゝに特殊的世界の散在が一つの普遍的世界に集中し、現代の世界史的世界を構成する準備期を形造るに至るのである。

六

文化的世界を意味してきた從來の概念は文化圏である。文化圏とは特定の共通様式をもつ文化の存する地域を意味してゐる。その文化はもと或る民族の文化より發展せるものであるが、民族的性格をもつと同時に強度の國際的性格をもつものであつて、このやうな文化が從來世界文化と稱せられてきたものである。佛教やキリスト教やイスラムはこのやうな意味で世界宗教であり、ヘレニズムや支那文化はこのやうな意味で世界文化と言はれ、ローマ法や唐の律令はこのやうな意味で世界法と言はれ得るのである。文化圏は古來多數存在するものであり、文化圏それ自體が盛衰の歴史をもち、従つてその範圍は歴史的に變遷してきてゐる。併しとにかく過去に多數の文化圏の存在が考へられて

きたことは、過去に多數の特殊的世界及び特殊的世界史が存在したことを現してゐる。我々はこのやうな文化圏を文化的世界と考へなければならぬ。文化と政治とは密接な關係をもつてゐる。併し文化的世界は必ずしも常に政治的世界と合致するものではなかつた。文化的世界は文化的世界としての特有な構造をもつてゐると考へなければならぬ。

『歴史の地理性と地理の歴史性』に於て論じたやうに、文化は人間の自發的精神と自然の風土的環境との合一に成立するものであり、従つて地域による特殊性をもち、簡單に他に傳播したり移植したりすることのできない固着性を有するものである。更にこの文化の固着性は、過去の自己を維持しようとする根強い傳統性と結びついて、極めて強靱なものとなつてゐる。このやうな文化を形成し維持する主體は、『人種、民族、國民と歴史的世界』に於て論じたやうに、人種といふべきものではなくして、民族といはるべきものであり、この民族といはれるものは、從來は必ずしも國民と一致するものではない。人種は自然的概念であり、民族は文化的概念であり、國民は政治的概念である。

或る地域の民族は、その風土的環境に合致した生活の中から、獨自な民族文化を形成して行く。この民族文化は、それ自體の内部から徐々に變化して行くにも拘らず、なほ風土的特殊性と歴史的傳統性によつて、極めて強い固着性を有し、容易に變化しない固定性を有するのである。勿論、そこには民族による程度の差がある。けれども、民族文化の中には、生命が自己自身を存続せしめようとする要求にも似た自己保存性があり、民族文化の發展には、言はず自然生長の如き作爲を越えた悠久さが存してゐる。地中海沿岸のある民族では、數千年來同じ鋤が今だに使用せられてゐると言はれる。併し文化といふものは傳播せられ、移植せられて行くものであつて、このことは歴史的事實の明かに示すところである。そしてこの傳播性や移植性は、また文化といふものの大きな特性をなすものであつて、文化

に世界史といふものが存するのはこの根據に基くと言はなければならぬ。

文化の傳播は或は民族の移動と共に起き、或は征服や侵略などに伴つて行はれるが、民族自體の移動や混淆を離れて文化そのものとしても傳播して行く。征服や侵略の如き政治的出來事、文化の傳播に大きな動きをなしたことは明かであるが、商業の如き經濟的交通もまた、文化の傳播に大きな働きをなしてゐる。アレキサンダーの東征はギリシヤ文化の東方への傳播を結果した。またペルシヤ、アラビアとの商業上の交通は、唐の文化に西方アジアの文化的要素を混淆せしめるに至つた。そして新しい異文化が傳達せられるとき、異文化と固有文化とは敵對關係をなして、激しい闘ひを繰返す場合もあるやうであるが、長年の間には相互の間に混融が生じ、國際的な折衷を経た別個の文化が成立し、これがまた自己自身の内部から發展して行く。キリスト教はローマ帝國に於て激しい闘ひを経た後に、ヨーロッパの世界宗教となつて新たに發展するに至つた。佛教は印度や西域の國際世界の中で發展を遂げ、支那や日本に東漸して更に獨自な發展をなすに至つた。民族の固有文化は、この國際的文化に倒される場合もあり、それに刺戟されて別個の發展をなす場合もあり、また國際的文化と並存して固有文化を強く存続せしめる場合もある。とにかく、文化の廣い傳播の結果、多くの民族的性格を折衷した國際的な文化が成立し、これが歴史的に發展して行くとき、こゝにはゆる世界文化が成立するのであつて、この世界文化の流通する範域がいはゆる文化圏に外ならないのである。ヘレニズム文化はこのやうにして成立した世界文化であり、いはゆる地中海世界はこの世界文化の流通する文化圏として完成した。イスラム文化やその文化圏、支那文化やその文化圏、西歐文化やその文化圏、みなこれと同様の意義を有するのである。そして古來、このやうな世界文化には常に中心が存し、世界文化の様式にはこの中心民族の文化が

指導的な力を有してゐた。これが世界文化が國際的性格をもちながら、同時に民族文化の性格を保持した所以である。

右に述べたやうな事情から、餘程特殊な場合を除き、一般に文化といふものは單に孤立して他と無關係に存するものではなく、常に一定の文化圏の内部に存してをり、その發展は文化圏との交渉に密接な關係をもつのである。何らかの程度の文化圏の成立は交通の成立と共に古いと言へる。勿論、この文化圏の性格には緊密の程度に多くの差があり、更に同じ文化圏の内部でも文化様式の共同性に、日常生活の形式と精神的文化とで異なる場合もあり、宗教とその他で異なる場合があり、文化の種類によつて色々異なる場合が存するであらう。そしてこのやうな文化圏は原理上いはゆる人種の同一性とは無關係であり、また政治的世界とは必ずしも一致するとは限らない。政治的に支配する民族が必ずしも文化的に指導力をもつと限らぬことは、支那と周邊諸民族との關係を見れば明かである。政治上中原の地位を占めた民族も、殆どみな漢民族の文化に同化せられるに至つてゐる。このやうに、文化が人種や政治に關係なく存立するといふ現象の生ずる根據は、文化といふものがその形成の主體や地域から獨立し得る觀念的存立性をもつところにある。これが文化が文化として傳播し得る所以である。技術は技術として傳播せられ、思想は思想として傳播せられ、法律は法律として傳播せられる。勿論、そこにはそれが或る地域の或る民族に於て成立し、或は特に發達し、従つてその地域や民族に固有な特殊性が潜んでゐるといふことはある。けれども、それが他の地域の民族文化に特に阻害となるものでない限り、或はそのまゝの形で受容せられたり、或はその地域の特殊性や民族の傳統に調和するものに變化せしめられたりして、文化は國際的に普及して行く。そしてこの間に國際的な性格をもつ文化が形造られてくるのである。文化のもつ觀念的存立性は、このやうに國際的文化を成立せしめる根據となるが、同時にそれは

また民族文化の發展を成立せしめる根據ともなる。民族文化が民族の生活に直接に結びついて、生活と文化との間に距離がないならば、自分の文化を客觀的に批判することも、この文化の批判を媒介として生活そのものを批判することもあり得ない。生活も文化も單に傳統的な存続性を保つのみで、そこに飛躍的な發展も創造も生じ難いのである。民族の文化に飛躍的な發展や創造が見られる歴史的事實は、文化が生活の文化でありながら、同時になほ生活に對して距離を隔てる客觀的存立性をもつことを現してゐる。そして生活と文化との自己批判の結果、飛躍的な發展や創造が行はれる場合、常にその批判に反省と建設の動力を興へるものが他の文化であり、特に國際的な世界文化である。換言すれば、民族文化の發展的形成も文化的世界の中から喚起せられてくるのである。

それ故、多くの民族文化が無交渉のまゝに並存してゐるときは、勿論文化的世界が存するとは言ふことができない。並存してゐる民族文化がたとひ類似のものでも、この理に變りはない。文化的世界とは自然地理的空間ではない。併し單に多數の民族文化の間に關係が見られるといふだけでも、未だ文化的世界が存するといふには不十分である。もしこれを特に文化圏と稱するならば、眞實の意味で文化的世界と稱せられるものは、民族文化が世界そのものから發展的に形成せられるところに存すると言はなければならぬ。世界は民族と民族との交渉から成立してゐる。併しこのやうにして成立した世界が、却つて逆に民族を形成してゐるとき、そこに勝義の世界といふものが存するのである。この意味では文化圏が文化的世界に進むと稱してもよい。このやうな文化的世界が歴史的世界に外ならないのである。そして民族が逆に世界から形成せられ、民族文化が却つて世界文化から形成せられるといふことは、好悪といふやうな恣意や自由を越えて、どうしてもさうせざるを得ないといふ一種の強制が、言はゞ歴史的世界の大きな壓力が臨

むといふことを意味する。民族意志に對して超越性をもつもので世界である。單に民族意志の連續的に擴大せられたものは、如何に廣くとも世界といふべきものではない。我が國が大化改新に於て、律令を始めとして當時の世界に對抗し得る文化をもつ文化國家を建設しなければならなかつたのは、もしさうしなければ、國內の氏族意志の鬭争を終熄して、國家の安定ある統一を實現することができず、三韓に對して嘗て安定勢力であつた日本の輝ける國威を回復し、以て日本の發展を期することができなかつたからである。明治維新の後、新たな近代國家を建設しなければならなかつた事情も、これに類似してゐる。封建的な分散態を脱却して國民的な統一を形成し、以て外侮を受けぬ強い國家を建設するためには、我が國はどうしても近代國家の體制を造らなければならなかつた。こゝには國家一個の主觀的意志を越え、好むと否とに拘らず、國家永遠の存續と隆昌を願へばさうせざるを得ないといふ世界からの要求、否、強制が働いてゐる。かゝるところに國史を以て盡きない世界史があり、國家を包越して國家ならぬ歴史的世界といふものがある。近代世界の成員たる國家に於ては、戰爭は近代的武器を使用する戰爭でなければならず、經濟は近代的資本主義に立つ經濟でなければならなかつた。でなければ、國家は國際場裡に於て敗亡せざるを得なかつた。今日、國家がいはゆる國防國家でなければならず、文化が現代文化でなければならぬ事情も、これと全く同一である。こゝに欲すると否とを超越した歴史的世界といふものの傾向があり、世界史の強制といふものがある。そしてこゝから歴史的世界としての文化的世界が、單なる文化的世界でなく、常に同時に國家意志を中心として文化外の諸勢力と結びついてゐることを知り得るであらう。純粹な文化とか文化的世界とかいふものはない。歴史的世界に於て、文化は文化外の諸勢力と綜合せられてのみ現存するのである。

こゝから我々は近代の文化主義が抱く文化の理念や、その理念から歸結する世界文化や文化的世界の、如何に抽象的な思想に出發し、如何に非歴史的な性格をもつかを會得し得るであらう。近代の經濟がいはゆる經濟人を前提し、倫理がいはゆる人格や理性人を前提すると同様に、文化主義の下には文化人ともいふべき人間理念の前提が存してゐた。この文化人の人間理念は經濟人や道德的人格と同様に、歴史的な民族も世界も離れた純粹の個人性にあると考へられた。そしてこのやうな個人性の内容が一般の人間性に外ならぬと考へられた。それ故、このやうな文化人の生存する文化的社會は、當然非歴史的な性格をもつものとなる。而もこれが直ちに文化的世界の理念とせられ、このやうな理念を實現することが文化發達の目標と考へられたのである。このやうな立場から構想せられる世界文化、或いはゆる人類文化の如きものが、歴史的な世界文化と全く異なることは言ふまでもない。このやうな文化主義は過去の世界文化史を理解し得ないのは勿論、また將來の正しい文化を建設する力も與へ得ないのである。既に經濟人や人格に就いて評したところから明かなやうに、文化主義の文化の理念は人間の自己分裂態から出發してゐる。近代の倫理や經濟が公私の分裂態、即ち私的個人性(欲望)と公的社會性(理性)との分裂態より出發したのと全く同様に、文化の理念も自然性(感性)と文化性(理性)との端的な對立から出發し、理性が感性を開發教化するところに文化の意義と過程を考へたのである。故に文化の理想は理性にあり、この理性の實現せられた状態に人類共通の世界文化が構想せられたのであるが、このやうな理想状態が全く理智的・合理的な構成に過ぎないことは明かである。このやうな文化は決して人間の完成をもたらすものではない。それは文化を人間の分裂態より考へ、分裂態のまゝで文化理想を考へるところから當然である。

文化はその根柢に於て歴史的名物である。歴史を離れては文化といふものが存しない。文化の世界は歴史的世界である。文化の起源も理想も、凡て歴史的世界の歴史的文化から成立するのでなければならぬ。文化は文化主義の考へるやうに理智的なものでなく、寧ろその根源に於て生命的なものである。個人的なものでなく民族的なものである。文化には前に言つたやうに自然生長的な生命力の如きものがあり、自己自身を存続せしめようとする傳統的固定性がある。生命力を失つた文化は病的である。單なる精神的文化や合理的文化は既に文化の頽落であり廢類である。大地を離れ民族を離れた觀念的文化は文化そのものの死滅に向つてゐる。健康な文化は大地の精力と生命の息吹とをもつてゐる。このやうな文化は一面で國際的な世界文化を産みながら、文化的世界の中であらう固有の生存を持續しようとする。世界文化に發展の動力を仰いで固有文化を變遷せしめつゝ、世界文化そのものを地域と民族とに合一せるものに變化する。一面で國際的な世界文化への開放性を持ちながら、他面で地域的民族性を確守しようとする。文化は世界性と民族性、開放性と封鎖性、普遍性と特殊性との緊張を孕む統一の中で發展し持續する。それ故、世界文化と言はれるものをとつてみてもそれは單純に國際的・普遍的なものではなく、常に民族と地域との特殊性を維持しつゝ現存してゐる。世界宗教としての佛教は、一つの概念に規定し得るやうな單一なものではない。佛教は印度、セイロンに於て、西域、支那、日本に於て、それぞれ違つた姿に於て現存してゐる。而もそれはなほ佛教であることには變りがない。キリスト教に於ても事情はこれと全く同様である。即ち、世界文化と言はれるものは、凡て一方で開放的な國際性を持ちながら、他方で常に一定の地域の民族文化に結びついてのみ現存するのである。眞實の文化は民族的・世界的である。單に精神的なものでなく、生命的・精神的なもの、即ち精神的な生命力をもつものである。

政治に於ける倫理と權力との綜合は *Moralische Energie* とも言ふべき倫理的な生命力に基くものであつた。政治と文化との結合點もまさしく倫理的・精神的な生命力に存するのである。時代の課題といふものは前代の文化理念が含む矛盾に發生し、文化理念と現實との乖離に誕生するものであつた。このやうな課題の解決は、従つて前代の文化理念にはなく、新たな政治力の中に存するより外ない。併しこの政治力は單に破壊的なる權力を意味するのではなく、新たな文化建設の力をもつものとして、自己自身の中に新たな文化理念を孕んでゐなければならぬ。これが政治に指導的力な方向を與へ、建設的な指針を示すものである。併し前代の文化理念を否定する政治力が、新たな文化理念を孕むことは如何にして可能であるか。それは單に非歴史的な文化理念、従つて單に觀念的な文化理念では不可能である。それは健康な倫理的・精神的生命力そのものの中に藏され、その中から生長して行くものでなければならぬ。このやうな生命力に於て、政治と文化との新たな結合が實現し得るのである。單なる精神と自然、單なる倫理と權力、このやうな乖離を結ぶものは健康な生命力である。倫理的な精神をもたぬ生命力は動物的であり、衝動的であり、單に盲目的・權力的である。倫理的な精神を孕まず生命力もなき政治や文化は死滅に向ふ病氣である。文化性を排する單なる政治の優位や、生命的活動性を失つた動かぬ文化理念は、歴史の運命と審判とに堪へぬ精神病的思想である。歴史上、多くの民族や國民は、このやうな精神病的思想に倒れて滅び、或はその回復から蘇生して新たに發展した。滅亡か否かの危機を克服するものは、常に清新な活力をもつ倫理的な生命力である。

多くの特殊の世界を一つの普遍的世界に結合し、現代の世界史を成立せしめる由因となつたものは、ヨーロッパ外への膨脹であり、この膨脹の動因をなしたものは近代資本主義の發展であつた。この近代資本主義は前

に述べたやうに單なる經濟ではなく、同時に國民の政治力と近代的な諸種の文化とを伴つたものであつた。歴史上の資本主義は單なる經濟的概念ではあり得ない。この場合、資本主義に結びついた近代文化の基本的なものは、機械技術と自然科学であつた。近代の機械技術に基いた大工場生産と、それに伴つた大營業組織とが、ヨーロッパのヨーロッパ外への膨脹を行はしめた現實的根據である。そしてこの機械技術の發展には、近代自然科学の發展が基礎をなしてゐる。それ故、資本主義を基礎としたヨーロッパの經濟的・政治的膨脹には、技術と科學とを中心とした近代ヨーロッパ文化の傳播が伴つてゐる。こゝに非ヨーロッパ地域のヨーロッパ文明化が成立し、文化上に於ける世界文化と統一的な文化的な世界とが成立するのである。近代世界史が本質的にヨーロッパ中心の世界史、或はヨーロッパ的世界史であつた歴史的・現實的根據はこゝにある。この場合、ヨーロッパ文明化せらるべき非ヨーロッパ地域の文明は、勿論ヨーロッパ文明と性質に於て異なるが、たとひ同質のものでもなほ發展の程度に於て差が存してゐた。このことは時代がヨーロッパとヨーロッパ外とで異なり、歴史的な時間が一つでなかつたこと、結局、歴史的世界が多數存続してゐたことを現してゐる。併し政治上・經濟上・文化上に於ける世界のヨーロッパ化は、やがて歴史的時間が内實上一つとなり、歴史的世界が實質上一つの世界となることを必然的に結果する。そしてこのことはやがて非ヨーロッパ地域の國家が、ヨーロッパ風の資本主義的體制を備へ、ヨーロッパの國家と對等の近代的國家となることを結果するのであつて、こゝにやがてヨーロッパ中心の近代世界が崩壞に達すべき根據が内在してゐる。勿論この根據は未だ傾向として存するに過ぎず、現實化せられた大きな力となつてゐない。併しこの崩壞の傾向の出現し始めたのは二十世紀に入つてからであつて、この傾向の漸次強化せられてきたところに、今日に於ける世界史の轉換の意義が存するの

である。そしてこの轉換には、非ヨーロッパ地域に於ていち速く近代國家の體制を整備した國家が、重要な役割を演ずるわけであつて、今日我が國の果しつゝある世界史的使命の一つは、こゝに基礎を有するのである。

このやうな轉換期に於て、近代世界の構成原理を代表した文化理念が、新たな現代世界の構成原理たり得ないことは明白である。併し今日の轉換期に武の實力をもつて動く政治力には、世界の新たな秩序を建設する文化理念が藏せられのである。そこには近代世界の秩序の維持をそのまゝ正義とする歴史の枯渇化に對し、新鮮で健康な倫理的・精神的生命力の躍動が存してゐなければならぬ。今日の世界戦争はいはゆる *Moralische Energie* の發現の意義を有しなければならぬ。この場合、新たな文化理念は一面で強く國家或は國民に結びつくことが要求せられると共に、他面で強く歴史的な世界性を有することが要求せられる。文化理念が國家・國民に結びつき、文化力が政治力と結びつく所以は、今日の世界史の轉換が國家の強い統一の意志を俟つてのみ完遂せられるところにある。民族は文化的概念であつた。今日の我々が有する民族の共同意識とその自覺的反省とは、實は近代の世界史の中より成立せるものであつた。民族文化の理念は近代世界の理論的所産である。併し近代に於て既に歴史上は國民が文化の主體であつた。政治と文化との綜合が要求せられる今日に於て、文化の主體は自覺的に國民であることが要求せられる。けれども、他面に於て世界的世界の出現しつゝある今日は、近世と違つた意味で新たな世界性を國民文化に要求するのである。それは世界を單純にヨーロッパ文明化しようとした近代文化の根本傾向が示したやうな文化の國際的一様化ではあり得ない。却つて文化の生命性の根源に振り返つて、その風土的地域性を重視し、各地域に獨自な國民文化の建設を意圖すると共に、その地域の産み落した優秀な文化的精神が交流し、その中から新たな世界文化が形成せられることを意

圖するのにならねばならぬ。こゝに各地域の文化はそれぞれ固有價值をもつ文化であると共に、共同の世界性をもつ文化たることが可能となる。即ち、多即一、一即多の調和が現成し得るのである。我々は文化の精神的・倫理的な生命性の根源に反省を深めるとき、却つて近代の文化主義からは考へ難かつた一多相即の法界の相が、歴史的な文化的世界の眞實の構造として望み得るのである。現代世界史の轉換に動く文化理念には、その根柢に於て、却つて歴史的世界の現實に根ざすこのやうな理想が指標となるのにならねばならぬ。